

【原著論文】女子大学生の対人関係ごとの居場所感について — 主観的幸福感との関連から —

矢野 加奈

金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程前期課程

The “sense of *ibashos*” in the personal relationships of female university students: A focus on subjective well-being

Kana Yano

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

This study aimed to elucidate the “sense of *ibashos*” and subjective well-being in the personal relationships of female university students. Based on previous studies such as Ishii’s (2009), a “sense of *ibashos*” is the way in which someone feels a sense of oneself and the feelings which are necessary in relationships with others. The subjects were university freshmen at a private women’s college (N = 181). The results showed that, as regards family relationships, one should act as one wishes and be able to show emotion. In relationships with same-sex friends, it means being true to oneself and acting towards others in a pragmatic way. In relationships with opposite-sex friends, it means having practical emotional relationships. In relationships with lovers, it means being able to maintain one’s own interests. Further, the authenticity inherent in each “*ibashos*” had a positive influence on subjective well-being.

Keywords : “sense of *ibasho*” (居場所感), Subjective Well-being (主観的幸福感),
female university student (女子大学生)

要 約

本研究の目的は、女子大学生の対人関係ごとにおける居場所感の構造を明らかにし、主観的幸福感との関連について明確にすることである。石井（2009）などの先行研究に基づき、本研究での「居場所感」とは、他者との間で自分らしくいられ、その相手にとって自分が必要だということを感じているかとする。私立女子大学生181名（M=20.09, SD=1.69）を対象に質問紙調査を行なった。結果、家族関係では、感情的に必要とされている、自分本位な行動やありのまま自分が受け入れられていること、同性のみの友人関係では、内面的に自分のままでいられ、目に見える形で相手から求められていること、異性を含む友人関係では、実際的に必要とされつつも情緒的なつながりが感じられること、恋人関係では、そのままの自分に対して相手の関心があるということを感じていると示された。主観的幸福感との関連では、主観的幸福感を高めるためには、それぞれの居場所でありのままでいられる感覚を得られるような関係を築くことが必要であることが明らかになった。

I. 問題

1. はじめに

「幸福」というものは様々な学問で追及されてきた。心理学の分野においても1970年代頃から幸福感の主観的な側面である主観的幸福感の科学的研究(寺崎・網島・西村, 1999; 伊藤・相良・池田・川浦, 2003; 浅井継吾, 2014)が行われている。その研究の中で, 牧野・田上(1998)は, 社会的相互作用が主観的幸福感を高める上で重要な要因であることを示した。社会的相互作用は量より質が大切であることを実証し, 浅く広い友人関係ではなく, 深く狭い友人関係の方が主観的幸福感を高めるという結果を得た。また, 徳永・松下(2010)は, ソーシャルスキルの質, それに対する相手の応答性によって主観的幸福感を感じる度合いが違ってくることを示唆した。それにより, 相手に自分を受け止めてもらっていると感じる度合いが高いほど主観的幸福感が高く, 反対にその度合いが低いと主観的幸福感が低いと実証された。一方で, 良好な対人関係ではないとされるいじめを過去に経験していると, 成長した後にも主観的幸福感に否定的な影響を与えることが明らかにされている(水谷・雨宮, 2015)。

以上のことから, 対人関係と主観的幸福感は関連があると考えられ, 主観的幸福感を促進するためには, 良好で質の高い対人関係を築くことが重要な要因の一つであると推察される。他にも, 主観的幸福感と関係の深い要因として自尊感情があげられている。

2. 自尊感情と主観的幸福感の関連

遠藤(1981)は, 「自尊感情とは, 社会とのかかわりの中での特定の役割, 価値観の達成を通して獲得される自己価値についての確信」としている。自尊感情は, 自己についての評価, 感情をさしており, 個人によってその内容は異なるが高い自尊感情を抱く人は, 自分自身を「好ましい人間」と感じ, 自分の行動を価値あるものと評価する(遠藤, 1992)。

自尊感情には適応的なものと不適応的なものがあり, Kernis(2003)は, 適応的な側面のみで構成される自尊感情の重要な性質として, “Authenticity”

をあげている。“Authenticity”とは, 個人の「自分らしさ」のみに焦点を当て, 自分自身の感情や意思に素直であることを意味する。伊藤・小玉(2005)は, “sense of authenticity”を「本来感」と訳し, 本来感が幸福感(well-being)の関連に与える影響を検討している。その結果, 本来感と自尊感情の両方が主観的幸福感に促進的な影響を与えていることが分かり, なおかつ, 自尊感情よりも本来感のほうが主観的幸福感に強い影響を与えていることが示された。そして, 本来感は自尊感情と比較して他者との温かい関係を築けている感覚を促進していることが明らかになった。よって, 本来感は主観的幸福感にとって重要な役割を担っている可能性があると考えられる。

また, 言い換えると, 「本来感」とは, 他者との間で我慢せずに自分らしいと感じられることと言える。つまり, 「本来感」を抱いているということは, 他者との関係の中で, ありのままの自分でいられるとすることができることと考えられる。石本(2010b)は, 教育臨床や心理臨床の領域において他者との関係の中で自分らしくいられ, 自分が役に立っていると感じられるところが居場所の心理的条件としている。

3. 心理的な意味での居場所

文部省初等中等教育局(1992)は, この報告書の中で「心の居場所」とは, 「自己の存在感を実感でき精神的に安心していることの出来る場所」とし, 学校が児童生徒にとってそのような場所になるように取り組むことが必要であると述べている。そして, この報告を皮切りに多くの新聞紙面や書籍で「居場所」が取り扱われるようになり, 言葉の意味も物理的な空間だけでなく, 時間, 人間関係などの心理的な意味合いも含んで用いられるようになった(石本, 2009)。

石本(2010a)は, 一人でいる個人的居場所と他者と一緒にいる社会的居場所に分類できるとし, その2つを区別して機能の違いと精神的健康との関連から検討している。その結果, 他者との関係性を育むような居場所づくりは, 精神的健康の促進に効果的であることが示された。そして, ありのままでい

ることができ、誰かの役に立っていると感じられる場が多い人ほど社会的居場所を確保できていることも実証された。また、石本（2009）は、他者と一緒にいる社会的居場所は、他者との関係性が居場所の基底的要素であると述べている。このことから、心理的な居場所として有用なのは社会的居場所と考えられる。社会的居場所とは、他者との関係性の中で育まれる居場所であり、対人関係の中で形成される心理的な居場所と言える。そして、本研究では、対人関係ごとの居場所の中で居場所の心理的条件である「自分らしくいられる感覚・自分が役に立っている感覚」をどう感じているかを「居場所感」とする。

4. 青年期の対人関係

久世（1994）は、青年の他者との相互作用では、親との関係の比重が弱まり、仲間、特に親友のような存在との関係性が重視されるとしている。大学生は、青年期に当てはまり、家族関係よりも友人関係に重きを置いている可能性が考えられる。

また、落合・佐藤（1996）は、青年期の友人関係は、発達とともに変化することを明らかにした。それによると、青年期のはじめには、浅く広く関わる付き合い方が多く見られ、これは、年齢を重ねるごとに少なくなっていく、反対に、深く狭く関わる付き合い方は年齢を増すにつれて多くなっていくこと、付き合い方が転換していく途中に深く広い付き合い方が多くなることが示されている。また、長沼・落合（1998）は、青年期の友達との付き合い方には、少なくとも16種類あることを実証し、男女において付き合い方に差異があることを明らかにした。女子は、青年期のどの段階でも同性の友人と密着した関係を持っているという特徴があり、一方、男子は、ありのままの自分を表出せず、同性の友達とは親密というより内面を隠した付き合い、いわば、防衛的な付き合いをしていると言う結果が得られた。友人関係だけでも多様なつきあい方があると言える。土井（2009）は、青年期の対人関係は、家庭での親との関係、学校での教師との関係、友人関係、先輩・後輩関係、バイト関係、恋人関係など多様化していると指摘している。加えて、それぞれで許されること・許されないことが違うなど、関係性が異なっ

ていると指摘している。

このように現在、対人関係は多様である。それにより、場面や相手によって自分のパーソナリティを変容させる若者が増え、青年期のパーソナリティは多元化してきている（大饗, 2009）。浅野（2009）は、青少年研究会の研究データの考察から友人関係の独特のパターンを読み取り、付き合いの程度に応じて異なる自己をみせ、いくつかの友人のグループのメンバーと他の友人のグループのメンバーが重ならないように友人関係を形成し、その相手との関係に没入し熱中して話すという特徴のあるパターンを明らかにした。

これらのことから、対人関係ごとに異なる関わり方をしていることが想定される。他者との関係性が基底的要素である社会的居場所は、対人関係ごとに居場所が異なっている可能性があり、それに伴い、そこで感じる居場所感も異なっていることが推測される。

II. 目的

数多くの実証研究において、主観的幸福感と社会相互作用の質の間に置いて、正の相関が見いだされ、他者との間に親密な関係を築けている方がより主観的幸福感が高いということが明らかになっている。（徳永・松下, 2010；牧野・田上, 1998）

心理的居場所では、他者との関係性を育むような居場所である社会的居場所が精神的健康に促進的な影響を与えていることが示されている。（石本, 2010a）つまり、質の高い社会相互作用とは、社会的居場所感が高いことであると考えられ、社会的居場所感が高いことは主観的幸福感とも関連があることが予測される。しかし、主観的幸福感と居場所感に関連があるかは、明らかにされていない。そこで、本研究においては、主観的幸福感と居場所感の間には、どのような関連があるのかを検討することを目的とする。

また、対人関係とその関わり方が多様化してきていることから、他者との関係性が基底的要素である社会的居場所は、対人関係ごとに異なっている可能性が考えられる。

従来の研究による知見を踏まえると、青年期における重要な対人関係は、家族、同性の友人、異性の友人、恋人関係に分類することができる(長沼・落合, 1998; 伊藤・小玉, 2003; 久世, 1994)。したがって、家族・同性の友人・異性の友人・恋人の関係ごとに居場所感が異なっている可能性が考えられる。よって、居場所感についての知見を基に女子大学生の家族関係、大学に入ってからからの同性のみの友人関係、異性を含む友人関係、恋人関係ごとに居場所をどう感じているか、それによって主観的幸福感にどのような変化があるのかを検討する。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象

愛知県内の私立の女子大学に通う大学生181名(19歳~23歳, 平均年齢20.09歳, SD=1.69)に調査を実施した。177名が回答し, 164の有効回答が得られた。

2. 調査時期・調査方法

2015年6月中旬~7月中旬に, 大学の講義時間中に約15分かけて実施された。

3. 調査内容

フェイスシートにて, 年齢, 所属(学科), 学年について回答を求める。また, 居場所感の心理的条件からみた女子大学生の対人関係ごとの居場所としての感じ方の程度と主観的幸福感の関連について調査するため, 以下の尺度を用いる。

(1) **居場所感尺度** 先行研究(石本, 2010b)を参考に居場所感を測る尺度として以下の2尺度を用いた。「ありのままにいられる」ことを測定する項目として本来感尺度(伊藤・小玉, 2005), 「役に立っていると思える」ことを測定する項目として自己有用感尺度(石本, 2010a)を使用し, 居場所感尺度を構成した。本来感尺度7項目と自己有用感尺度7項目の計14項目で構成され, 5件法で評定される。女子大学生の家族関係, 大学に入ってからからの同性のみの友人関係と異性を含む友人関係, 恋人関係における居場所感を測定した。各対人関係と一緒にいる

ときを想起するよう促した後, どの程度あてはまるかを「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。項目については各対人関係に対応するように, 一部の語句を変更している。また, 同性の友人関係, 異性を含む友人関係, 恋人関係の対人関係ごとにその対人関係が形成されて何年になるのかを自由記述で回答を求めた。(2) **主観的幸福感尺度** 主観的幸福感を測る尺度として, 伊藤・相良・池田・川浦(2003)が作成した主観的幸福感尺度を用いる。5因子, 各3項目の合計15項目で構成されており, 4件法で評定される。その中で「人生に対する失望」の3項目は逆転項目である。項目について, 選択肢が断定的であったため, 疑問文に変更し, 先行研究(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)において主成分が低い項目(自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じることがありますか)を削除した。

Ⅳ. 結果

1. 尺度の検討

居場所感尺度について, 対人関係ごとに全項目について主因子法, バリマックス回転で因子分析を行い, 家族関係では3因子, 他の対人関係では2因子を抽出した。逆転項目は反転してある。家族関係では, 固有値の減衰傾向(固有値は7.82 → 1.20 → 1.02 → .75と減少した)と解釈の可能性から, 3因子を抽出した(Table.1)。第1因子は自分が必要とされている, という意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから〈感情的自己必要感因子〉とした。第2因子では, ありのままの自分が出せる, 自分らしくいられるという意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから, 〈自己表出因子〉とし, 第3因子では, ゆるがない自分を持っている, 自分を見失わないでいられるという意味内容の項目に高い負荷を示していることから〈自己維持因子〉とした。

同性の友人関係においては, バリマックス回転での因子分析の結果, 固有値の減衰傾向(固有値は7.72 → 1.24 → .99と減少した)と解釈の可能性から, 2因子を抽出した(Table.2)。第1因子では,

Table 1 家族関係における居場所感の因子分析結果

項 目	I	II	III	共通性
〈感情的自己必要感因子〉 $\alpha = .90$				
9. 私がいなくて家族がさみしがる	.85	.20	.13	.78
11. 自分が必要とされていると感じる	.74	.33	.41	.83
1. 私がいなくて家族が困る	.67	.22	.14	.52
6. 家族から関心をもたれている	.65	.39	.16	.60
8. 自分が役に立っていると感じる	.62	.18	.47	.64
13. 自分に役割がある	.50	.21	.44	.49
〈自己表出因子〉 $\alpha = .90$				
2. いつも自分らしくいられる	.30	.80	.27	.81
5. ありのままの自分が出せる	.37	.76	.30	.80
4. 自分のしたいことをすることができる	.20	.70	.35	.65
〈自己維持因子〉 $\alpha = .85$				
12. いつもゆるがない「自分」をもっている	.30	.32	.76	.77
10. いつも自分を見失わないでいられる	.43	.41	.57	.68
〈残余項目〉				
3. 自分の存在が認められていると感じる	.57	.55	.26	.69
7. これが自分だ、と実感できるものがある	.51	.37	.46	.61
14. 他人と自分を比べて落ち込むことが多い*	-.03	-.08	.23	.06
自乗和	3.9	2.85	2.16	8.91
寄与率 (%)	55.88	8.57	7.31	71.76

*は逆転項目

Table 3 異性の友人関係における居場所感の因子分析結果

項 目	I	II	共通性
自己確認因子 $\alpha = .90$			
10. いつも自分らしくいられる	.82	.24	.73
11. これが自分だ、と実感できるものがある	.79	.21	.66
14. 自分のしたいことをすることができる	.78	.15	.63
6. いつも自分を見失わないでいられる	.77	.25	.65
3. ありのままの自分が出せる	.71	.41	.66
13. いつもゆるがない「自分」をもっている	.68	.23	.52
有用実感因子 $\alpha = .85$			
4. 私がいなくて友人が困る	.16	.91	.85
7. 私がいなくて友人がさみしがる	.23	.85	.77
5. 自分が必要とされていると感じる	.26	.77	.66
9. 友人から関心をもたれている	.46	.64	.63
残余項目			
2. 自分が役に立っていると感じる	.18	.61	.60
8. 自分の存在が認められていると感じる	.53	.58	.24
12. 自分に役割がある	.40	.50	.42
1. 他人と自分を比べて落ち込むことが多い*	-.03	-.04	-.23
自乗和	3.81	2.95	6.76
寄与率 (%)	57.14	16.49	73.63

*は逆転項目

私がいなくて友人が困るという意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから [実際の自己必要感因子] とした。第2因子では、自分らしくいられる、自分を見失わないでいられるという意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから [無理のない自分因子] とした。

異性を含む友人関係において、バリマックス回転での因子分析の結果、固有値の減衰傾向（固有値は 7.35 → 1.79 → 1.12 → .78 と減少した）と解釈の可能性から、3因子を抽出したが、第3因子の因

Table 2 同性の友人関係における居場所感の因子分析結果

項 目	I	II	共通性
[実際の自己必要感因子] $\alpha = .89$			
3. 私がいなくて友人が困る	.81	.17	.69
10. 自分が必要とされていると感じる	.80	.32	.73
5. 私がいなくて友人がさみしがる	.72	.18	.55
12. 自分が役に立っていると感じる	.68	.33	.57
9. 自分に役割がある	.65	.39	.58
[無理のない自分因子] $\alpha = .91$			
13. いつも自分らしくいられる	.50	.74	.80
14. いつも自分を見失わないでいられる	.38	.73	.68
8. いつもゆるがない「自分」をもっている	.27	.72	.59
6. ありのままの自分が出せる	.44	.67	.64
11. 自分のしたいことをすることができる	.37	.66	.57
1. これが自分だ、と実感できるものがある	.40	.65	.58
[残余項目]			
4. 自分の存在が認められていると感じる	.60	.57	.68
2. 友人から関心をもたれている	.56	.47	.69
7. 他人と自分を比べて落ち込むことが多い*	.00	.13	.02
自乗和	4.33	3.89	8.22
寄与率 (%)	55.13	8.89	64.02

*は逆転項目

Table 4 恋人関係における居場所感の因子分析結果

項 目	I	II	共通性
《好意関心因子》 $\alpha = .93$			
9. 恋人から関心をもたれている	.84	.26	.77
13. 自分が必要とされていると感じる	.84	.34	.82
2. 私がいなくて恋人がさみしがる	.76	.34	.69
1. 自分が役に立っていると感じる	.74	.38	.69
7. 私がいなくて恋人が困る	.73	.35	.65
12. 自分に役割がある	.65	.44	.62
《そのままの自分因子》 $\alpha = .82$			
14. いつもゆるがない「自分」をもっている	.28	.86	.82
8. いつも自分を見失わないでいられる	.30	.78	.70
10. いつも自分らしくいられる	.49	.74	.79
11. これが自分だ、と実感できるものがある	.47	.73	.74
3. 自分のしたいことをすることができる	.37	.70	.62
4. ありのままの自分が出せる	.25	.35	.18
5. 他人と自分を比べて落ち込むことが多い*	.12	.34	.13
《残余項目》			
6. 自分の存在が認められていると感じる	.62	.56	.70
自乗和	4.72	4.21	8.93
寄与率 (%)	58.98	9.19	68.17

*は逆転項目

子負荷量が少なく、妥当性が得られなかったため、削除した (Table. 3)。第1因子では、自分らしくいられる、自分を実感できるという意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから |自己確認因子| とした。第2因子では、私がいなくて友人が困る、さみしがるという意味内容を表す項目に高い負荷を示していることから |有用実感因子| とした。

恋人関係においては、バリマックス回転での因子分析の結果、固有値の減衰傾向（固有値は 8.26 → 1.29 → .95 と減少した）と解釈の可能性から、2因

Table. 5 主観的幸福感の因子分析結果

項目	I	II	III	共通性
【幸福実感因子】 $\alpha = .82$				
12. 過去と比較して現在の生活は (幸せ)	.68	.19	-.02	.50
5. ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	.64	.29	.06	.50
14. あなたは人生が面白いと思いますか	.64	.38	.10	.56
10. 非常に強い幸福感を感じるときがありますか	.61	.17	.27	.47
11. 自分の人生に意味がないと感じていますか*	.53	.33	.10	.40
9. 自分がやろうとしたことはやりとげていますか	.47	.16	.26	.31
【実現自信因子】 $\alpha = .70$				
3. 今の調子でやっていけば、これから起きることにでも対応できる自信がありますか	.17	.85	.24	.81
2. これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか	.36	.52	.20	.43
1. 将来のことが心配ですか*	.10	.49	-.08	.25
13. 危機的な状況 (人生を狂わせるようなこと) に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信はありますか	.30	.42	.16	.29
【期待充足因子】 $\alpha = .53$				
6. 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたいと思いますか	.05	-.01	.69	.47
4. ものことが思ったように進まない場合でも、その状況に適切に対処できると思いますか	.29	.39	.51	.49
【残余項目】				
8. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか*	.52	.48	-.11	.51
7. 自分が地球に住むものということに喜びを感じることがありますか	.39	.02	.08	.16
自乗和	2.92	2.21	1.04	6.17
寄与率 (%)	36.86	9.35	9.11	55.32

*は逆転項目

Table. 6 各対人関係の居場所感尺度、主観的幸福感の各因子の相関

主観的幸福感	幸福実感	実現自信	期待充足	家族		同性の友人		異性の友人		恋人
				感情的自己必要感	自己表出	自己維持	実際の自己必要感	無理のない自分	自己確認	有用実感
異性の友人有・恋人有群 (N=46)	1	.31*	.32*	.43**	.39**	.41**	.61**	.43**	.19	.11
	2	.23	.31*	.41**	.53**	.58**	.29*	.26	.18	.28
	3	.02	.04	.18	.33*	.44**	.23	.14	.34*	.41**
異性の友人有・恋人無群 (N=49)	1	.49**	.29*	.40**	.38**	.57**	.44**	.16		
	2	.28	.11	.28	.23	.29*	.12	.04		
	3	.06	.06	-.00	-.01	.10	-.00	.01		
異性の友人無・恋人有群 (N=21)	1	.40	.39	.38	.46*	.39	.40	.39		
	2	.28	.06	.19	.06	.18	.28	.06		
	3	.04	.32	.16	.09	.09	.04	.32		
異性の友人無・恋人無群 (N=48)	1	.40**	.44**	.45**	.35*	.47**				
	2	.14	.21	.36*	.27	.28*				
	3	.21	.28	.51**	.16	.24				

** $p < .01$, * $p < .05$

子を抽出した (Table. 4)。第1因子では、恋人に関心を持たれている、自分が必要とされていると感じるといった意味内容の項目に高い負荷を示していることから《好意関心因子》とした。第2因子では、いつもゆるがない自分をもっている、自分を見失わないでいられるといった意味内容の項目に高い負荷を示していることから《そのままの自分因子》とした。

主観的幸福感尺度について全項目に主因子法、バリマックス回転で因子分析を行い、固有値の減衰傾向 (固有値は 5.16 → 1.31 → 1.28 → .94 と減少した) と解釈の可能性から、3因子を抽出した (Table. 5)。逆転項目は反転し、因子負荷量が.40以上のものを採用した。第1因子では、過去と比較して現在の生活はどのくらい幸せか、どの程度幸せを感

じているかという意味内容の項目に高い負荷を示していることから【幸福実感因子】とした。第2因子では、これから起きることに対応できる自信があるか、これまでどの程度、成功したと感じているかという意味内容の項目に高い負荷を示していることから、【実現自信因子】とした。第3因子では、期待通りの生活水準を手に入れた【期待充足因子】とした。

因子ごとに α 係数を算出したところ、主観的幸福感尺度の【期待充足因子】以外の全ての因子において、 $\alpha = .70 \sim .93$ という高い値が得られ、内的整合性が確認された。【期待充足因子】は $\alpha = .53$ と、やや低いものの著しく問題があるとは考えられず、このまま使用することとする。

2. 居場所感と主観的幸福感の関連

回答人数が異なるため、異性の友人有・恋人有群、異性の友人有・恋人無群、異性の友人無・恋人有群、異性の友人無・恋人無群の4群に分けた。各群においての対人関係ごとの居場所感と主観的幸福感の各因子の相関係数をTable.6に示す。

主観的幸福感の3因子の中では、【幸福実感因子】が対人関係ごとの居場所感と多く相関が見られた。異性の友人有・恋人有群、異性の友人有・恋人無群での家族関係の居場所感の3因子と相関が見られた($p < .01$, $p < .05$)。また、異性の友人無・恋人有群以外、同性の友人関係における居場所感の2因子と主観的幸福感の【幸福実感因子】との間に相関が見られた($p < .01$, $p < .05$)。一方で、どの群においても、恋人関係における居場所感と主観的幸福感の【幸福実感因子】との間には、相関が見られなかった。

相関分析の結果より、どの群でも同性の友人の居場所感は主観的幸福感の【幸福実感因子】と正の相関を示しており、同性の友人の居場所感が高い人ほど主観的幸福感の【幸福実感因子】が高いことが確認された。

3. 主観的幸福感に居場所感が及ぼす影響

各群それぞれで、各対人関係の居場所感を独立変数とし、主観的幸福感の因子を従属変数とする重回帰分析を行った。(Table.7, Table.8, Table.9)

異性の友人有・恋人有群において、各対人関係の居場所感と【幸福実感因子】では、 R^2 は.56で0.1%水準で有意であり、{自己確認因子} ($\beta = .56$, $p < .001$) および《好意関心因子》 ($\beta = .45$, $p < .05$) はともに主観的幸福感に正の影響を及ぼしていた。

また、各対人関係の居場所感と【実現自信因子】では、 R^2 は.25で5%水準で有意であったが、対人関係ごとの居場所感の各因子は影響を及ぼしていなかった。

さらに、各対人関係の居場所感と【期待充足因子】では、 R^2 は.45で1%水準で有意であり、[無理のない自分因子] ($\beta = .93$, $p < .01$) および《好意関心因子》 ($\beta = .47$, $p < .05$) はともに主観的幸福感に正の影響を及ぼしていた。

Table.7 異性の友人有・恋人有群の主観的幸福感に居場所感が及ぼす影響の結果

従属変数：幸福実感因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	.16
	自己表出因子	.20
	自己維持因子	-.29
同性の友人	实际的自己必要感因子	.03
	無理のない自分因子	.35
異性の友人	自己確認因子	.56***
	有用実感因子	.04
恋人	好意関心因子	.45*
	そのままの自分因子	-.32
R^2		.56***
従属変数：実現自信因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	-.02
	自己表出因子	.12
	自己維持因子	-.05
同性の友人	实际的自己必要感因子	.04
	無理のない自分因子	.51
異性の友人	自己確認因子	.13
	有用実感因子	.03
恋人	好意関心因子	.24
	そのままの自分因子	-.06
R^2		.25*
従属変数：期待充足因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	.06
	自己表出因子	-.11
	自己維持因子	-.18
同性の友人	实际的自己必要感因子	-.49
	無理のない自分因子	.93**
異性の友人	自己確認因子	.13
	有用実感因子	.01
恋人	好意関心因子	.47*
	そのままの自分因子	.02
R^2		.45**
N=44		*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

異性の友人有・恋人無群において、各対人関係の居場所感と【幸福実感因子】では、 R^2 は.40で0.1%水準で有意であり、[無理のない自分因子] ($\beta = .49, p < .05$) は主観的幸福感に正の影響を及ぼしていた。

また、各対人関係の居場所感と【実現自信因子】・【期待充足因子】では、有意な結果は得られなかった。

Table 8 異性の友人有・恋人無群の主観的幸福感に居場所感が及ぼす影響の結果

従属変数：幸福実感因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	.43
	自己表出因子	.03
	自己維持因子	-.27
同性の友人	実際の自己必要感因子	-.11
	無理のない自分因子	.49*
異性の友人	自己確認因子	.15
	有用実感因子	-.10
R^2		.40**
N=4		** $p < .01, *p < .05$

異性の友人無・恋人有群において、各対人関係の居場所感と【幸福実感因子】・【実現自信因子】・【期待充足因子】では、有意な結果は得られなかった。この群では、 $N=20$ であり、サンプル数が少なかつたため、結果が得られなかったと考えられる。

異性の友人無・恋人無群において、各対人関係の居場所感と【幸福実感因子】では、 R^2 は.32で1%水準で有意であったが、対人関係ごとの居場所感の各因子は影響を及ぼしていなかった。

また、各対人関係の居場所感と【実現自信因子】では、有意な結果は得られなかった。

Table 9 異性の友人無・恋人無群の主観的幸福感に居場所感が及ぼす影響の結果

従属変数：幸福実感因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	.06
	自己表出因子	.22
	自己維持因子	.13
同性の友人	実際の自己必要感因子	.05
	無理のない自分因子	.25
R^2		.32**
従属変数：期待充足因子		標準偏回帰係数
独立変数		β
家族	感情的自己必要感因子	.01
	自己表出因子	-.04
	自己維持因子	.56**
同性の友人	実際の自己必要感因子	.01
	無理のない自分因子	-.07
R^2		.26*
N=49		** $p < .01, *p < .05$

しかし、各対人関係の居場所感と【期待充足因子】では、 R^2 は.26で5%水準で有意であり、〈自己維持因子〉 ($\beta = .56, p < .01$) は主観的幸福感に正の影響を及ぼしていた。

V. 考察

1. 尺度の検討

居場所感尺度について各対人関係に全項目について主因子法、バリマックス回転で因子分析を行い、結果から対人関係ごとに居場所感の意味内容が異なることが明らかになった。

家族の居場所感においては〈感情的自己必要感因子〉、〈自己表出因子〉、〈自己維持因子〉の3因子が抽出された。この3因子の意味内容から女子大学生は家族の居場所感において情緒的に必要とされていると感じること、また、自分の行動が受け入れられること、自分があるままでいられることを感じていることが明らかになった。光元・岡本(2010)によると、母親や父親との間に情緒的な繋がりを感じられる関わりを経験していることで、その関わりが内在化していき、発達とともに自分を認めてもらいたいという自立心が生まれ、自分を一人の人間として認めてもらいたいと思うようになっていく。そのため、家族関係の居場所感では、自分らしい行動や思いを認め、その背景に実質的な利益ではなく、内在化された情緒的な繋がりを感じていると推察できる。

同性の友人関係における居場所感では、[実際の自己必要感因子]と[無理のない自分因子]の2因子を抽出した。2因子の意味内容から実質的に必要とされている、自分が無理して合わせることなく一緒にいられると感じていることが示唆された。同性の友人は、日々の生活の中で共に行動することが多い。その生活の場は、バイト先、大学、買い物など、社会的な場面と考えられる。高坂(2010a)によると、女性は同性の友人関係において支援してもらうことを期待している。その具体的な場面で自分が必要とされていることによって、自分は相手にとって役に立ち、友人を支援できていると感じられると推察できる。また、玉瀬・富平(2007)は、友人同士の関

りにおいて、互いにそれぞれが期待している役割を遂行していると認知するときに両者の関係は安定して親密化が進むとしている。よって、同性の友人関係では、互いに支援をしあっており、そのことを認知していると考えられ、居場所感においても実際に必要とされていると感じていたのだと推測される。また、金子（1989）は青年女子の同性の友人に対し、強く心理的につながりがあり、理解しあった関係であると感じていると明らかにしている。自分が無理しなくても相手は自分を理解してくれているという感覚を持つことができることが今回の結果につながったと考えられる。

異性の友人の居場所感において、同性の友人の居場所感と類似しているが、感情的な面で必要とされることを同性の友人との間よりも感じていること・異性との交流の中で自分らしさを確認、省みている可能性があることなどの相違が見られた。青年期では異性の親族ではない若者を重要な他者として選ぶこと（久世，1994）からも異性の友人には同性の友人とは少し異なる関係性を求めており、そのことが今回の結果につながったと考えられる。異性の友人関係の居場所感では、実際に必要とされつつも情緒的なつながりが感じられていると言える。

恋人の居場所感では、自分に関心を向けられていると感じるとともに自分というものをはっきりと持っていることと示された。恋人には、自分の行動よりも自分そのものに気持ちを向けてほしいという思いが背景にあると考えられる。また、自分自身を強く持っていることから、相手に合わせて変化させた自分ではなく、‘そのままの自分’に対して相手が気持ちを向けることが恋人の居場所感を抱くことに繋がったと考えられる。

同じ異性との関わりであっても、異性の友人と恋人の居場所感では、その内容は大きく異なっていた。豊田・藤田（2001）は、女性は明確に恋人に関する感情と異性の友人に対する好意を区別しており、異性の友人と同性の友人に対する感情は類似しているとしている。青年期女子にとっては、友人関係と恋人関係において、一緒にいるときに抱く居場所感が異なっていると考えられる。

以上のことから、青年期女子の居場所感、どの

対人関係においても同一なのではなく、相手との関係性によって異なる可能性が示唆された。

2. 居場所感と主観的幸福感の関連

異性の友人有・恋人有群では、同性の友人の居場所感の2因子と主観的幸福感の3因子との間に関連があることを示された。どの群においても同性の友人関係が重視されるのは、問題と目的で述べたように青年期後期には質の高い友人関係を形成している可能性が高いこと（久世，1994）、女性は女性同士の関わりの中の方が男性との関わりよりも自分らしさを感じる（伊藤・小玉，2003）などから、女子大生は同性の友人との間に居場所感を抱きやすかったのと考えられる。浅井（2014）によると、主観的幸福感、相手に合わせて行動しすぎることによって低下する。このことから今回の結果を考えると、同性の友人との間で、相手に合わせすぎず、自分らしく関わることができると自覚していることよって、主観的幸福感が高くなると考えられる。

また、今回想起してもらった同性の友人は、大学生活の時間の大半を共に行動する相手である。その相手との間に居場所感をどのように感じているか、がとても重要であることが示唆された。大学生になると、多様な場で対人関係を築くことができるようになる。その中で、最も長く時間を共にするのが大学生活における友人であると考えられる。その中で、自分がありのままに居られ、必要とされていると実感できることは、主観的幸福感に繋がると考えられる。

異性の友人有・恋人有群では、恋人との居場所感では、過去の幸福感を表す【幸福実感因子】や自分の能力に対する自信を表す【実現自信因子】では関連が見られなかった。恋人関係は、家族関係や友人関係よりも、まだ比較的短期間の関係である可能性が高い。現在の恋人との居場所感が現時点での幸福感に関係しても、過去からのつながりを持った幸福感では、関連が見られなかった可能性が考えられる。しかし、今後の自分が期待通りの未来を歩めると感じていることを表す【期待充足因子】では関連が見られた。恋人がいるということで、将来の自分がうまくやっっていけるのではないかと思うことと関連が

ある可能性が示唆された。また、異性の友人有・恋人有群ということは、女子大学の友人のみならず、他の場所でも対人関係を形成できており、色々な友人がいて、恋人もいるという満足感があるのではないかと考えられる。そのため、恋人との関係性が、自分が今後、なんとか上手く社会で生きていけるのではないかと、という意識の支えに繋がっているのかもしれない。

3. 居場所感が主観的幸福感に及ぼす影響

主観的幸福感の下位因子に各対人関係の居場所感尺度の下位因子が正の影響を与えていた。

まず、異性の友人有・恋人有群では、異性の友人との間で、自分らしさを実感できると現在幸せだと思うこと、同性の友人との間で無理せずに自分らしくいられると将来について自分が上手く生きていけるのではないかと感じる事が明らかになった。また、異性の友人有・恋人無群では、同性の友人との間に無理しなくても自分らしくいられると実感できることが今、自分が幸せであると感じる要因になっている。さらに、異性の友人無・恋人無群では、家族の中で自分らしくいられると感じることが将来的に自分はうまく生きていけると思えることに影響することが示された。

これらのことから、恋人関係以外は、各対人関係の「自分らしさ」を表す因子が主観的幸福感の下位因子に影響を与えていることが示唆された。これは、自分らしさを表す本来感が主観的幸福感に促進的な影響を与えることを明らかにした伊藤・小玉(2005)の結果とも一致している。よって、主観的幸福感を高めるためには、家族や友人において自分らしくいられると感じられるような居場所を築くことが必要であることが示唆された。

一方で、異性の友人有・恋人有群において、恋人関係の《好意関心因子》は主観的幸福感尺度の【幸福実感因子】・【期待充足因子】に正の影響を与えていた。高坂(2010b)は、アイデンティティの確立と恋人関係の関連を調査し、アイデンティティが安定した状態の恋人から関心に向けられることで、自分に自信が付き、充足感が得られることを明らかにしている。本研究においても、恋人がいることによっ

て、自分の生き方や行動に自信が付き、現在の生活に満足感が得られ、そのことが主観的幸福感の【幸福実感因子】や【期待充足因子】を高めることに繋がったと考えられる。

本研究の結果から、各対人関係それぞれに合った居場所感を抱くことが主観的幸福感を高めることになると考えられる。

4. まとめ

本研究の結果から、女子大学生の居場所感は対人関係ごとに異なっていることが示唆された。関係性の異なる他者に対して、どの相手にも同じような居場所感が必要なのではなく、各対人関係に合った居場所感を抱くことが必要であると言える。また、居場所感は、自分という確固たるものがあってそれを受け止める場所というより、場所ごとに自分を変化させ、変化した自分がそこに必要だと求められながら、居られることが大切なのかもしれない。よって、居場所感は、対人関係ごとに変化する可能性があると考えられる。

また、居場所感と主観的幸福感は関連があることが明らかになった。主観的な幸福感を高めるために、それぞれの対人関係に合った居場所感を抱くことは重要であると示唆された。

本研究では、今回、各対人関係の居場所感と主観的幸福感の関連を示唆したが、各対人関係による主観的幸福感への影響の相違がどのようにして生じるのかについては明らかにしておらず、研究の対象も一校のみでサンプル数も充分であるとは言えない。

今後の課題として、サンプル数を増やし、共学の大学などを対象に女子学生とは異なる特徴を持つ男子学生についても居場所感と主観的幸福感の関連を検討することなどが求められる。そして、青年の対人関係の背景にある要因を検討することでより主観的幸福感を高めるような居場所づくりの方法を明らかにしていくことが必要である。

VI. 参考文献

浅野智彦(2009). 若者とアイデンティティ 日本図書センター

- 浅井継吾 (2014). 青年期の過剰適応が主観的幸福感に及ぼす影響 心理学研究 85(2), 196-202.
- 土井隆義 (2009). キャラ化する／される子どもたち—排除方社会における新たな人間像— 岩波書店
- 遠藤辰雄 (1981). 人生周期と同一性 遠藤辰雄 (編) アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 pp.12-27.
- 遠藤辰雄 (1992). セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求— ナカニシヤ出版 pp.8-25.
- 石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の一側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(1), 1-6.
- 石本雄真 (2009). 居場所概念の普及及びその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 93-100.
- 石本雄真 (2010a). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から— カウンセリング研究43(1), 72-78.
- 石本雄真 (2010b). 青年期の居場所感が心理適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21(3), 278-286.
- 石本雄真・斎藤誠一 (2007). 中学生の生活が居場所感にあたえる影響について 神戸大学発達科学部研究紀要, 14(2), 1-6.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2003). 「自分は本当の自分である」という本物感についての研究 (1) —男女別に見た本物感とwell-beingとの関連— 日本教育心理学会総会発表論文集, (45), 246.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74(3), 276-281.
- 金子俊子 (1991). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, (3), 10-19.
- Kernis, M.H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 高坂康雅 (2010a). 大学生における同性友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 パーソナリティ研究, 18(2), 140-151, 2010.
- 高坂康雅 (2010b). 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連 発達心理学研究, 21(2), 182-191.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 厚生労働省 (2013). 平成25年版厚生労働省白書—若者の意識を探る— 厚生労働省 2013年9月10日 〈<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/>〉 (2016年1月15日)
- 久世敏雄 (1994). 相互作用の中での青年の発達 久世敏雄 (編) 現代青年の心理と病理 福村出版 pp.9-23.
- 牧野由美子・田上不二夫 (1998). 主観的幸福感と社会的相互作用の関係 教育心理学研究, 46(1), 52-57.
- 光元麻世・岡本祐子 (2010). 年期における心理的居場所に関する研究—心理社会的発達の視点から 広島大学心理学研究, (10), 229-243.
- 水谷聡秀・雨宮俊英 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響 教育心理学研究, 63(2), 102-110.
- 文部省初等中等教育局 (1992). 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して— 学校不適応者研究協力者会議 1992年3月13日 〈<http://www.futurefutoko.org/documents/kyouryokusha1.html>〉 (2015年7月21日)
- 森田薫 (2003). 青年期におけるソーシャル・サポートと主観的幸福感との関連—対象表象の視点を加えて— 九州大学心理学研究, 4, 167-175.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友人とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 大饗広之 (2009). 「豹変する心」の現象学 勁草出

版

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.

斉藤富由起 (2007). 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金蘭大学紀要 (生活科学部・人間社会学部), 4, 73-84.

笹川果央理 (2015). 自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討:—自己価値の随伴性からの整理パーソナリティ研究, 24(2), 112-123.

曾我部佳奈・木村めぐみ (2009). 青年期における大学生の主観的幸福感—その影響要因の探索に向けて— 和歌山大学教育学部紀要, 60, 81-87.

玉瀬耕治・富平美智子 (2007). 大学生の「甘え」

と友人関係 帝塚山大学心理福祉学部紀要, 3, 59-72.

寺崎正治・綱島 啓司・西村智代 (1999). 主観的幸福感の構造 川崎医療福祉学会誌, 9 (1), 43-48.

徳永美紗子・松下姫歌 (2010). 青年期の友人関係における主観的幸福感, ソーシャルスキルおよび対人相互作用の質との関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 80-90.

豊田弘司・藤田正 (2001). 大学生の愛情と好意における性差 奈良教育大学教育研究所紀要, 37, 31-35.

山岡もも・松永しのぶ (2013). 高齢者の友人関係—友人関係機能, 友人関係満足感と主観的幸福感の関連— 學苑, 868, 9-19.